

わがたましいよ。主しゅをほめたたえよ。
主しゅの良よくしてくださったことを何一つ忘わすれるな。

主しゅはあなたのすべてのとがとがゆるゆるし、
あなたのすべての病やまいをいやし、あなたのいのちを穴あなから
贖あがない、あなたに、恵めぐみとあわれみとの冠かんむりをかぶらせ、
あなたの一いっしょう生よを良よいもので満みたたされる。
あなたの若わかさは、わしのように、新あたらしくなる。

詩篇 103：2-5

神かみはそのひとり子こを世よに遣つかわし、その方かたによって
私わたくしたちに、いのちを得えさせてくださいました。
ここに、神かみの愛あいが私わたくしたちに示しめされたのです。

私わたくしたちが神かみを愛あいしたのではなく、神かみが私わたくしたちを愛あいし、
私わたくしたちの罪つみのために、
なだめそなの供ものえ物ものとして御みこ子つかを遣つかわされました。
ここに愛あいがあるのです。

1ヨハネ 4：9-10

いま私わたくしが、この世よに生いききているのは、
私わたくしを愛あいし私わたくしのためにご自身じしんをお捨すてになった
神かみの御みこ子つかを信しんじる信しんこう仰ようによっているのです。
私わたくしは神かみの恵めぐみむを無むにはしません。

ガラテヤ 2：20-21

(聖書)

大親友の訪問

わがたましいよ。主しゅをほめたたえよ。
私わたくしのううちにあるすべてのものよ。聖せいなる御みな名なをほめたたえよ。

詩篇 103：1 (聖書)



作者不明

Translator Sachi Nakamura · Illustrator Junko Kato

大親友の訪問

ある日の昼頃、牧師は礼拝堂に誰か祈りに来ているかどうか、
ちょっと覗いてみようと思ひ、礼拝堂の中に入っていました。

ちょうどそのとき、扉が開き、ひとりの男がやってきました。
その男の顔には無精髭が伸びているのをみると、牧師は眉をひそめました。彼のシャツは薄汚れており、上着はヨレヨレで擦り切れていました。男はひざまづき、しばらくの間、頭を垂れ、そしてすぐに立ち上がり出ていきました。
その日以来、その男は毎日正午になるときまって礼拝堂に現れました。そして30秒ほどひざまづくのです、
手には弁当箱とおぼしき袋を持って。

「強盗にでも入る隙を狙っているのだろうか？」

いぶかしく思った牧師はある時 ついに男を呼びとめ、尋ねました。

「君、ここで一体何をしているのかい？」



彼は教会からやや離れた工場で働いているのです。

30分だけの昼休みを利用して、力と元氣を得るために、毎日そこに祈りに来ていたのです。

「ほんのちょっとしかいられないんですがね、なにしろおいらが働いている工場は、この教会からはちょっと離れているもんで。ここにこうしてひざまづいてね、神さんにこんな具合に祈るんでさあ。

『 神さん、これが言いたくて、また来ました。

あなたがおいらの罪を取り除いてくださって以来、おいらはずーっと嬉しくて仕方がないんですよ。

あなたがおいらの大親友になってくださって、すごく嬉しいんです。どうやって祈ったらいいのかあんまりよくわからないんですが、とにかく神さんのこと、毎日思っていますよ。

だから、イエスさん、ジムです、顔出しに来ました。』

いらぬ疑いを持ったことを恥ずかしく思いつつ、牧師はジムにいいました。「そうですか。それは大変素晴らしいことですね。これからもいつでも祈りに来て下さい。」



「さあ、もういかなくちゃ。仕事に遅れちゃったら大変だ。」

ジムはにっこり笑うと、大急ぎでその場を立ち去って行きました。

牧師はジムがいつもするように、祭壇の前にそっとひざまずきました。

こんなことをするのは初めてでした。彼の冷えていた心はときほぐ

され、イエスの愛で満たされていくのがわかりました。

頬を涙が伝うのもかまわず、彼は小さな声でジムの祈りを繰り返して見ました。

「神様、これが言いたくてまた来ました。

あなたが私の罪を取り除いてくださって以来、私はずーっと嬉しく

て仕方がないのですよ。あなたが私の大親友になってくださって、

すごく嬉しいのです。どうやって祈ったらいいのか

あんまりよくわからないのですが、とにかく

神様のこと、毎日思っています。

だから、イエス様、私です、

顔を出しに来ました。」



ある日の午後、牧師はまだジムがその日は来ていないことに気が

きました。そしてジムが現れない日は何日も続きました。

心配した牧師がついに工場へ行きジムのことを尋ねると、

ジムは病気で入院していたのです。

病院では医者や看護婦たちがジムのことを噂していました。

彼には花はおろか、電話一本、カードの一通も送られてこない、

見舞客も一人も来ない、それなのに、ジムはいつも笑顔で喜び一杯

なのです。しかも彼の喜びは回りにいる人達にも伝染して、ジムが

入院して以来、その病棟の雰囲気が一転してしまったのです。

病院にかけつけた牧師は、ベッドに横たわっているジムのかたわら

に立ち、言いました。

「看護婦さんたちは皆んな不思議がっていますよ。

付き添いも見舞いも全然ないのに、あなたがいつも嬉しそうに

ニコニコしているから。」



「^{かんごふ}看護婦さんたちは間違えているんですあ！」

まあわからないのも無理はないですがね。^{まいにち}毎日、^{ひる}昼になるとね、
あの方が来て下さるんですよ。おいらの^{だいしんゆう}大親友のあの方が。

^{ほくし}牧師さんならわかるでしょう？

あの方がね、ほらここ、^{すわ}ここんとこに座って、おいらの^て手を握ってね、
こういうふう^いに言ってくれるんですよ。」

ジム、これが言いたくて、また来ましたよ。

私^{つみ}があなたの罪を取り除いて以来、
私はずーっと^{うれ}嬉しくて仕方がないんですよ。

私^{だいしんゆう}はあなたの大親友になって、

すごく^{うれ}嬉しいんです。

私^{いの}はあなたが^き祈るのを^{だいす}聞くのが大好きです。

とにかくあなたの^{まいにち}こと、毎日思っていますよ。

だから、ジム、イエスです、^{かお}顔を出しに^き来しました。

